後に回鶻文を記して居るが、兩者の關係を見ると、第一卷（Ch. XIX, 001）に於ては所記の漢文は、直後に譯出せらるゝ回鶻文の首部であつて、回鶻文は此等僅かづゝ記さるゝ漢文よりも、遙に多くの字句の譯である。ところで此等の漢文の字句は、其の出所を求めて見ると、第一卷に於ては、「釋曰」の下に括せらるべきものゝ外は、皆漢譯俱舍論の本頌と長行との字句の摘出されたものであることが分る。さうして其の下に記されて居る回鶻文は、各々此等の字句に始まる本頌や長行の一句或は數句の、極めて忠實なる譯述に外ならぬことが認められる。たゞ漢譯俱舍論に存しないで、回鶻文實義疏中に存する文句は、その「釋曰」の下に括せられる分に外ならぬ。茲に於てか、此の回鶻文實義疏の基づいた漢文の安慧の實義疏といふものは、卽ち俱舍の本頌と長行との上に、更に諸所に「釋曰」として、時には問答の形により、時には單なる說明の形によりて、安慧の解釋を施した體裁のものであつたことを認め得ると思ふ。此の釋の部が原文にどれだけ忠實に譯出されたものであるかに至つては、今日無論判然とは定め難いが、幷しその頌と長行とが、後に揭げる如く極めて忠實に譯出せられ、その結果回鶻語本來の語法を無視するまでに至つて居ることから考へると、この釋の部分に限つてその體裁を更めるべき理由は無く、必ずまた同樣であつたらうと認めて過らないと思ふ。ただしかし斷つて置かねばならぬことは、譯文中には或る本頌については、たゞその一部分だけを譯出し、他は省略してしまつた所もある。例へば界品の「有漏無漏法……別得非擇滅」の頌については、本書卷一の八十七枚裏に、最初の「有漏無漏法」の一偈を譯したゞけで、其の他に及ばざるが如きはそれである。之は原本になつた漢譯本が既にかゝる體裁であつたが爲か、或はまた譯者が論に重きを置いて、頌についてはかゝる省略を施すに至つたものか、何れとも定め難い。